

て、形状大に相違するのみならず、舶來もせざるなり。略又百舌鳥うぐひすに充てたる説あり、是は本草綱目に陳藏器曰、百舌今之鶯也、其誤は集解に時珍委しく論せり。略

石川丈山は割葦うぐひすに充てたり、是亦大なる誤なり。略此邦うぐひすはいづれに充たる

かといふに、貝原氏の本草名物附録及び江村如圭が名物辨解に載せたる報春鳥は、大抵時候名

稱も能く充たれるやうに覺ゆ。中余原先年癸未の夏、長崎に在りて、朝鮮學士將仕郎韓用楫

と對坐筆語せし時、問ひて曰、鶯所謂黃鳥者、朝鮮之地多居乎、用楫答曰、黃鳥果多、人稱喚友鳥、又問

曰、其大比鷓鴣如何、正二月之間、期梅花而來、發圓滑之聲乎、又曰、此邦所謂鶯者、非真黃鳥、形比鷓鴣

稍大、其來必正二月之間、上暗香樹枝而鳴、用楫答曰、鷓鴣之謂正合當、而真鶯三四月子、飛樹林間、鳴

此答形状は詳ならざれども、喚友鳥といひ、三四月といへば、彼地に居る事疑なし、されば鶯も、婆

餅焦も、百舌及割葦も、皆此邦うぐひすに充たらず、凡べて是のみならず、此土に有りて、漢土に無

きもの牽強して、漢名を充てむとするより、古今誤稱するもの頗多し、其的充しがたきは、國字に

て事足りぬべし、尤學者の心得べき事なり、

〔出雲風土記鳥根郡〕法吉郷、郡家正西一十四里二百三十步、神魂命御子宇武賀比比賣命、法吉鳥、化

而飛度、靜坐此處、故云法吉、

鶯種類

〔本朝食鑑六林禽〕鶯訓字久比須

集解、鶯似雀而青黃褐色、腹白眼、纖背細尖而蒼黑、脚掌亦然、啼則搖尾、立春前後有聲、季秋無聲、其聲

清高、圓滑、曲節而多轉、飛啼則急而長、俗稱日月星、或苔藤、或寶法華經、此皆據聲調而言也、官家畜之

竹籠、僉言關西之鶯者音清而和、關東之鶯者音濁而嚴、是有其理、人物亦然矣、此鳥能知春氣之至、籠

中亦候至則啼、或九十月亦天氣溫和如春、則有聲、此亦應節趨時之禽乎、冬月棲竹篁深處、而蟄于舊

巢之邊、每窺竹中之小蟲而捕食之、一林之中、雌雄相棲不交、他之同類若誤同類、至則必逐之、凡鶯之